

豊田英雄女史御慰安會に列して

併せて、貴重な幼稚園史資料の數々——

倉 橋 惣 三

豊田英雄女史が、我國最初の幼稚園保姆として、國寶的存在であられることは言ふまでもないが、その御慰安の會が、昨年十二月八日、水戸市教育會館に於て、茨城縣保育會總會と共に催された。私は、總會の講師として

に接することが出来、嬰孩の御様子を見ることの出来たのは、私の近來の喜ばしい日であつた。

その日は何んといつても十二月の天候が氣づかはれた

招かれたを好機として、その慰安會に列して、久し振りで老女史に拜晤するの幸を得た。昭和三年水戸のお宅にお邪魔して幼稚園史資料につき教を乞ひ、十一月特にお茶の水の附屬幼稚園にお迎へして、幼稚園懷舊談話會を催し、一同で敬意を表して以來、「幼兒の教育」第二十八卷十一、十二月號所載親しく拜晤することを、心ならずも忘つてゐた。但し、常に人を介して御消息は詳かにし、御健勝のこゝを伺つて居り、殊に、この間、ブルガリヤ國からの需めに應じて、日本幼稚園の功勞者として女史の近影を送つた時にも、お變りなき御健康を喜んだのであるが、かうして、親しく温容

御慰安會に於ける豊田女史と筆者



が、思ひ設けぬ程の溫暖な好晴に恵まれた。會の始まる十時、自動車でお宅から會場へお迎へしたのであるが、女史は令孫豊田健彦氏夫人に手をさらされて、會場正面の腕掛椅子につかれた。私の席が女史と隣りして設けられてあつたのは、恐縮のことも思つたが、お蔭で女史のおそばに最も近く居ることを得た。

女史は茶ミゼンのお召に、立葵の紋をつけた黒い被布を重ねてゐられた。おぐしは決して少くない白髪を後ろに束ねて、鬘甲の小櫛でまとめてゐられた。さうして、さつかも大椅子一ぱいに掛け倚つてゐられる體格は、實に堂々たるものであり、殊にお顔の色のつやゝかさは、九十六歳の御老齡とは思へない。主催者や來賓からの、女史に對する御慰安の辭につき、記念品として美しい大座蒲團が贈呈された後、女史のお話に移つたが、お耳が遠いだけで、充分張りのある聲で、記憶もしつかり、表現もしつかり、長い時間いろ／＼の懷想を語られた。令人唱歌の話が出て、「風車」から「いかばかり」、「ゆきやあられ」、つづいては「むろのさこぢてあそびなば」なごき記憶を辿られつゝ、「てふてふ／＼」は加藤きん子さんが作つたのでしたよ。あの人はさういふ才能のある人でした。早くなくなつて惜しい人でした等の追想を繰りかへされながら、「てふてふ」を聲高に歌ひ出したりされた。その譜もたしかに、殊に、あの歌の

感情さいつたやうなものが、極めて新鮮に、お元氣な笑顔に蘇り上つたには、私をして、若い豊田保姆を目の前に躍動せしめた程であつた。女史も「けふは昔に返つたようだ」を繰りかへし言つてゐられた。それから、松野クラ、さん（開園當時の幼稚園に主席保姆として、フレール式保育法を指導した人）のこをおおき／＼したら、「あれはドイツの人ですが、自分の子も連れて来て、手をたゞきながら、日本語で唱歌をうたつた。記憶のいゝ人でした。娘さんはおふみさん。松野佃さん（夫君）がなくなられてから、ドイツへ歸られて、その後消息が無かつた。さうされたか。立たれる時には、さこぢだか送つて行つたが、さこぢじやつたか忘れました。」なごきはれたりした。古い／＼ながら情の濃かなお話である。しかも、お話はもつこ古い時にさかのぼつて、誰れか、「先生は烈公さまの御前で薙刀を使つて御覽に入れられたそうですが、さこぢ尋ねしたら、「あれは極く若い時のこで、御殿のお庭で、たゞほんの型をつかつただけでした。殿様はおみすの内で御覽になりました。」と答へられた。その他いろ／＼のお話も次第に口をついて出るさいふ調子で、二時間近くの時間を大層機嫌よく過され、「大層古い昔にかへつたようだ」を、笑ひながら言はれたりした。そして十二時前、會の人がお伴して自動車でお宅へお送りされたが、歸宅の後も樂しかつた話を話してゐられたさいふ

こゝを健彦氏夫妻から聞き、お障りなくてよかつたと思つた。正直にいへば、あゝ數年で百歳といふ人の心身が、あゝもしつかりしてゐられることは、私には不思議な位である。その方が幼稚園開設當時の記憶をはつきり話されながら、私達が歴史といふ古い筐の中のこゝのやうにのみ思つてゐることを、實感的にすん／＼言はれる言葉を聞いては、失禮さ思ひながらも、お顔をまじ／＼見入つた程であつた。そして又思つた。私もまだ／＼若い。年齢じやあない。日本の幼稚園に身を置いてから何十年、相當に古顔さか先輩さかの部に入れられてゐるが、豊田女史の傍に立つては、日本幼稚園のほんの若造に過ぎない。殊に私のやうに、女史によつて礎石を置かれたといつていひお茶の水幼稚園を誦いでるながら、ロクに築き上げ得てもゐない者としては、女史にお會ひする毎に、ひこりて恥入つてゐるのである。

○

豊田女史はしつかりした記憶をもつてゐられるばかりでなく、きちようめんの性質から、昔のものを丹念に保藏してゐられる。この日もそれを拜見したのであるが、先づ私の目を注がせたものは、「皇后宮御清覽順序」さいふ題の朱野も、高雅な筆致の墨の色も燦々である、純楮和紙數枚の假綴りの手記であつた。私としては、つい五日前に、皇后

陛下の御巡覽を、附屬幼稚園に仰いだ感激が、まだそのままに胸にある時である。常々しても貴重なこの資料が、格別の電觸でも持つものやうに、手のふるうやうな思ひをさせたのである。

この手記には日附けがないが、野紙が東京女子師範學校のものであるから、その時代の行啓であることは確である。而して、女子師範學校時代(即ち女子高等師範學校と稱せられる以前)の行啓は、明治十年十一月二十七日と明治十四年五月二十四日の二回であつて、明治十四年の御巡覽は、その事項が記録にあり、この手記とは別である。殊にその時は、開誘室を組の名で呼んでゐるたから、この手記は、明治十年の行啓であることが疑ひない。

さて、その明治十年十一月二十七日は、東京女子師範學校附屬幼稚園の開園式の日である。附屬幼稚園の創設は、明治九年十一月十六日であつたが、内容の多少整ふを俟つて更めて開園式が擧げられたのである。當日は時の皇太后宮(英照皇太后)御同列で、皇后宮(照憲皇太后)の行啓があつたのであつて、幼稚園教育のために、皇后宮からも、皇太后宮からも御辭を賜ひ、實に我國幼児保育の輝しき出發式であつたのである。その日の記事は、翌二十八日明治十年十一月の日々新聞にあつて、「……此の時文部大輔以下校長等校前に出でて迎ひ奉り校長先導して設けの御休息所へ

着御ならせ玉ふ。此所にて文部大輔及び校長は拜謁を仰せ付らる。夫より幼稚園に至らせ玉ひ開誘室及び遊嬉場に進御あり、夫よりまた御休憩所へ還らせたまふ、此の時本校の教員生徒は御座前に整列して敬禮す。畢て晝食を召し上られ再び幼稚園へ入らせ給ひ遊嬉室に進御なる、……記してある。それ等のことは、「日本幼稚園史」(三八頁―四二頁)にも採録して置いたが、その御巡覽事項が明らかでないことを、久しく遺憾としてゐたのである。それがその幼稚園へ、皇后陛下の行啓を仰いだ月、それも僅に數日を超えただけの日に、この事項を明らかにし得たのである。手帳を出して筆寫する私の手がふるふ思ひがした。

皇后宮御清覽順序

幼稚園開誘清覽順序

一 幼兒整列シテ門内ニ奉迎ス

皇后宮既ニ着御成ラセテ各組開誘室ニ入り御式畢ルヲ待ツ

右畢ツテ 皇后宮

第一開誘室へ渡御

第一回 第五ノ形體建方及ビ問答

但シ渡御ノ際敷禮ス以下做之

亞ニ 第二開誘室へ渡御

第一回 博物畫解及ビ小話

亞ニ 第三開誘室

第一回 球ノ遊ビ小話

亞ニ 第一開誘室

第二回 縫畫及ビ體樣

但シ二回ヨリ敬禮ナシ、以下做之

亞ニ 第二開誘室

第二回 織 紙

亞ニ 第三開誘室

第二回 鎖ノ連接

亞ニ 總員話説所ニ於テ唱歌

亞ニ 同ジク庭園ニ出テ遊戯

右畢ル

この第二回にあるのは、御晝食後再度の御巡覽を意味するのであらうが、「二回ヨリ敬禮ナシ以下做之」にある意味に到つては、餘りの長しさに、解説の言葉も知らないのである。

次に最も興味を惹いたのは、豊田女史が受けられた昔の辭令類である。それを順序づけて見るに、女史の傳記中の最も重要な點なるに共、當時の教育界の狀況を示すに

ころが多い。

一 金三圓

發櫻女學校教師雇入以來教授方致勉強候趣相聞候ニ付
爲其賞標書下賜候事

明治八年五月七日

發櫻女學校教員 豐田冬

小學小訓導試補申附候事

但月給金四圓助給候事

豐田英雄

茨城縣團

明治八年十一月二日

茨城縣團

辭職之儀願

發櫻女學校教員 豐田英雄
今般私儀少訓導試補拜命難有仕合ニ奉存候然處萬般未
熟其任ニ兼堪候間斷然御免相願度此段御聞濟可然偏ニ
奉懇願候也

明治八年十一月六日

豐田英雄團

豊田伴女

豊田冬

東京女子師範
學校校長 鹿入相哉
此ニ付至急同於
出頭可致事
明治八年十二月

茨城縣

金三拾圓

豊田冬

本校創始以來
勉勵相勤候ニ付
市手當トシテ被下之
明治九年七月

東皇師範學校

四等訓導

豊田英雄

幼穉園係母專
務可相心得事
但一月金貳圓増給
候事
明治九年十月三日

東皇師範學校

茨城縣權令中山信安殿

願之趣難屆聞候條勉勵致事

明治八年十一月九日

茨城縣

少訓導試補差免候事

明治八年十一月二十日

豐田伴母

茨城縣團

豐田冬

東京女子師範學校ニ於テ雁入相成候ニ付至急同所へ出頭可致事

明治八年十一月

茨城郡團

貫田冬

東京女子師範學校助訓豐田英雄

鹿兒島縣幼稚園設立ノ為メ

縣令申出ニ趣有シ、付同縣

可致出張候事、

但出張申勸務、候同縣ノ指示

ヲ為スルハキ事

明治十二年一月廿四日

文部省

東京女子師範學校助訓
豐田英雄

幼稚園開設ニ付該事

業擔當申付一ヶ月金

五拾圓給與候事

明治十二年三月十三日

鹿兒島縣

金三拾圓

豐田冬

本校創始以來勉勵相勸候ニ付御手當トシテ被下之

明治九年七月

東京女子師範學校

四等訓導 豐田英雄

幼稚園保姆專務可相心得事

但一ヶ月金貳圓増給候事

明治九年十月十二日

東京女子師範學校



東京女子師範學校助訓

豊田 英雄

鹿兒島縣幼稚園設立ノ爲縣令申出之趣有之ニ付同縣へ

可致出張候事

但出張中勤務之儀ハ同縣ノ指示ヲ受クベキ事

明治十二年一月二十四日

文 部 省

東京女子師範學校助訓

豊田 英雄

幼稚園開設ニ付該事業擔當申付一ヶ月金五拾圓給與候事

明治十二年三月十三日

鹿兒島縣

女史は明治十二年二月(十六日)に送別會が開かれてゐる

東京を出發し、その使命を果して、明治十三年七月歸京、

再び、女子師範學校附屬幼稚園保姆としての現職に復し、明治十四年の行啓を迎へられたのである、

斯う記し來つて、私の史興は止まるどころを知らぬ程湧いて來るが、談が豊田女史のこゝからそれてゆきそうだから、此邊で筆を擱くことゝする。たゞ、筆を擱く前に、もう一つ是非記して置かなければならぬものは、豊田女史のローマ時代の洋装の寫真である。今更さう申しては失禮かも知れないが、なんさいふ麗人なのだらう。イタリヤに行かれたのは明治二十年から二十四年迄であつたから、四十三、四歳のお歳頃だと思ふが、眉目の秀麗と共に、洋服洋帽のすつきり自身に就いてゐる加減、當時のインテリ振りが想ひやられ

る。今でも、家庭で曾孫を相手にされてゐる時なき時々フランスが飛び出すご伺ふのも、此のスマートなローマ仕込みでは、さこそごこそ思はれる。又そのローマ時代、いっしょにローマ法皇に調せられたごいふ。時のドイツ大使若き西園寺公が、後に文部大臣として、宇都宮の高等女學校の爲に、特に女史をその教頭に薦めたのも、一時の著想ではなかつたに相違ないと思はれる。女史の保藏されてゐる古書翰の中には、「豊田英雄様楮右、公望として宇都宮の寓に宛てたものもある。

壽齡九十七歳。閑静な水戸のお宅で、令孫健彦氏ごその夫人ごの行き届いた孝養の中に、悠々たる朝夕を楽しんでゐられる女史の上にこの冬も暖かく、愈々加餐加齡せられるごころを、切に祈つて已まない。

張家口市日本幼稚園開設

大陸に活躍せる邦人第二世の保育は國策上重大使命を有す

待遇は外地第一位の稱あり

本俸は大體六、七十圓まで（人物に依る）

手當は本俸の十四割

住宅料本俸の三割

家族手當も四月より創設、賞與は大凡五十割

内外

保姆約五名採用

氣候は大連より稍々温暖

交通 北京より七時間蒙疆の入口

首府所在地 人口は十五萬内日本人二萬

治安は部隊駐屯し確保

物價は内地の二倍乃至三倍

是非御發奮あらんごころを切望す。御希望の方は編輯係宛て申出でられたし。